The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中世延暦寺の本末関係に関する基礎的研究
Author(s)	長谷川, 裕峰
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/55702
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　長谷川裕峰　）	
論文題名	中世延暦寺の本末関係に関する基礎的研究

論文内容の要旨

大阪大学大学院日本史研究室へ進学して以来、中世における天台宗寺院の寺院構造や所領経営・法流のあり方を解明すべく研究に取り組んできた。膨大な研究蓄積のあるテーマであるため、成果の発表には若干の時間を要したが、近年有意義な論考を発表することができた。それらの研究成果をまとめる形で博士申請論文として提出する。

中世における延暦寺の動向は、当該期の寺院史のみならず、その社会構造を考える上で重要である。実際、中世の寺院史研究を飛躍的に発展させた黒田俊雄氏が提起した権門体制論・顕密体制論は、延暦寺の事例をその出発点とする。しかし、これを継承した研究では、東大寺文書・東寺百合文書・高野山文書等を中心とする検証が主流を占め、現存史料の乏しい延暦寺は研究の俎上から遠退いた。報告者は史料不足という不利な状況の克服のために、以下の二つの研究視角を提唱したい。

(A)延暦寺の末寺史料に注目し、末寺の立場から本寺（延暦寺）が有した政治経済的側面を描く方法

(B)本末関係に内在する法脈などの人的交流に跡付けられた宗教的側面から考察を進める方法

これは、近年の大きく進展する山門研究の成果を最大限に活用した方法論である。下坂守氏は、幅広い史料の蒐集から延暦寺の基礎的な構造を解明し、山門使節・山門公人・山徒・門跡等の実態に言及した。それらの成果を背景に、伊藤俊一氏・稲葉伸道氏・平雅行氏らによって青蓮院門跡の歴史的・政治的展開が丁寧に説明され、衣川仁氏は延暦寺大衆の活動を、三枝暁子氏が京都支配を巡る延暦寺と室町幕府の関係を分析している。現在の山門研究は、本寺（延暦寺）の内部構造を論述したものが主流であり、その研究蓄積を基礎として、末寺を含めた全体像を描かねばならない段階に入ったのである。本末関係を軸とする上記の(A)(B)二側面からの探求は、これらの成果を総合的に含み込む議論へと発展し、今後の山門研究をさらなる高みへ昇華させる要素となろう。

筆者の研究でいえば、業績一覧に挙げた発表論文のうち、①②③⑤は視角(A)により、拙稿④⑥⑧が視角(B)により検討した論考である。特に拙稿④では、それまで経済的な末寺役と考えられていた「出雲莚」の宗教的側面に焦点をあて、本寺への納入後、七仏薬師法（現在の延暦寺において最も格式高い御修法で修されている）の調度品として使用された事を実証した。さらに、年間行事の記した史料を、実際に法会を行う側の視点から読み解き、これまでの中世研究者には出来なかった正しい解釈へと導く道筋を示した。これらは、天台の法儀に通じた者にしか出来ない仕事であり、方法(B)の有効性を示す証左となろう。

このように、実態に基づいたリアルな本末関係を考えるためには、その背景にある宗教性を避けることは出来ない。しかし、本末関係の宗教性が潜在的に有する影響力の大きさに関して、歴史学では、積極的な検討対象とはならず、少し遠ざけられてきた経緯がある。特定の宗派に執らわれず、仏教全体の流れの中で日本仏教を理解しようとするのが仏教学であり、これに対して、特定の宗派の立場から、その宗派の教理を研究する学問が「宗学」と呼ばれる。仏教史研究の立場を宗学・仏教学・正統的史学・民俗学に分類した黒田氏は、「宗派分立発達史」の排除を繰り返し主張した。氏は、従来の日本仏教史が、現存する宗派単位に宗教史を構成する「宗派史観」に支配されてきたとした。その中では、宗派の宗旨を基準として、宗派ごとに主観的な立場から宗教史を叙述することが多かった。こうした場合、当時の宗教全体における各宗派の客観的な位置付けが不明確になるという問題意識のもと、黒田氏の顕密体制論は構築されたのである。

この主張は、それまでの研究手法における問題点を鋭く突いたもので、その後の中世仏教史研究に新機軸をもたらし、大きく学界を動かした。顕密体制論を継承する平雅行氏は、「天台宗史・浄土宗史・日蓮宗史・禅宗史といった、タテ割りの宗派単位の歴史叙述を寄せ集めることによって仏教史を構成しようとする立場」を「宗派史的方法」と定義した。その上で、宗派史的方法による宗教史は、寺誌・高僧伝→流派史→宗派史→仏教史→宗教史と単純な加算によって構成されてきた、としている。

一方で、この通仏教的な把握を目指す顕密体制論のもとでは、個別寺院・僧侶間での法脈・法儀の伝承といった、

宗派内部に限定される事象の探求や成果を捨象する傾向を生み出した。それは、黒田氏の「仏教ないし宗義の概念に通じないものには宗教思想史の論文が理解できない、という事態は、いったい学問として科学として正常なことであろうか」という真摯な研究姿勢と表裏一体のものといえる。確かに、黒田説の提唱以降、中世社会における仏教の位置付けや政権との距離を推しはかる研究動向は活発化し、中世仏教史は中世国家論の一要素として広く認識されることとなった。と、同時に、「宗学」で追究されてきた法脈や教義・教理・法儀の伝承という、宗派特有の状況に即した限定的な分析方法そのものが、「宗派史観」にまみれた研究として倦厭され、本末関係解明の足枷となった可能性は否定できない。

学位申請論文では、本末関係の持つ宗教性を重視する立場から、誤解を恐れず、いわゆる「宗派史観」に基づいた「宗学」で詳らかとなる本寺での法儀や論義を考察対象とする研究方法を重視したい。平氏は、宗派史的方法の問題点と共に、「個別宗派史研究が不要なのではなく、それぞれの宗派が社会や国家の中で、どの程度の比重をもっていたのかを過不足なく見定めた宗派史研究こそが、必要なのである」と述べている。本末関係の宗教性を追うことは、「宗学」を確認する作業であり、その中から構築された本末関係論は、当該期の政治的・経済的な状況把握へとつながり、中世社会において果たした役割を究明することに有機的に結び付く。

すなわち「宗派史観」や「宗派史的方法」の持つ問題点は、宗教と国家という視角から進められてきた個別研究によってある程度克服されてきており、その成果全体を包括した新しい宗派研究こそが顕密体制論の次なる発展を生むのである。そこでは、必然的に対象史料の読み方・選び方にも違いが生じる。黒田史学で一旦、脇に避けられて以降、日の目を見ていない史料を本流に戻し、考察を加えるのである。筆者は、従来の「宗学」研究に回帰するのではなく、歴史学として公正なる評価を行うために、その材料を提供してくれる優秀な方法論として、もう一度「宗学」を我々の土俵に戻したいと考える。このような問題関心と研究視角に基づいて、以下の通り章立てした。

まず、第一章「葛川明王院における行者中」では、葛川明王院と青蓮院門跡の人的つながりに深く関係する行者中を検討する。恒常的組織として成立した行者中は、本寺青蓮院の門流別に即して構成されており、門跡との本末関係を背景に葛川支配を実行したことを明らかにする。

第二章「葛川明王院蔵「諸御領役御仏事用途廻文」再考」では、明王院に伝存する「青蓮院門跡領仏事用途廻文」に注目し、修法供料と徴収の実態を論じる。長らく「明王院領」と誤解されてきた本史料を、その内容から青蓮院門跡関係者の仏事用途が門跡領に賦課された徴収帳であることを論証する。その上で、複雑な門跡領を解明するためには『葛川明王院史料』を青蓮院関係史料として読み直すことで、山門史料の少ない点を補うという方法論を提唱する。

第三章「青蓮院門跡の所領経営と葛川明王院」では、第一・二章で解明された「青蓮院―葛川」の強固な本末関係を踏まえ、門跡領における所領経営を考察する。門跡領経営の基本理念が修法供料の確保にあり、各所領から徴収された料足が門跡の仏事用途や出仕料として使用されていたことを実証する。また、寺務に長けた門徒が自らの知行分を中心に、その他の門跡領の管理も担当する様子を示し、葛川明王院という門跡外の拠点にて門跡全体に関わる寺務を施行する傾向の出現を指摘する。

第四章「出雲国鰐淵寺と青蓮院門跡の本末関係」では、出雲国鰐淵寺が青蓮院門跡の末寺となった経緯を京都における政治的な背景を踏まえて検討する。加えて、末寺役として納入された出雲莚から、鰐淵寺が青蓮院の修法体系に包摂されていたことを論証する。その結果、青蓮院から法儀の伝播があった証左を示し、先行研究で不足していた空白の一三〇年間における本末関係の実態を明らかにする。

第五章「鰐淵寺における法儀の伝承と南北朝内乱―「正平式目」の評価を巡って―」では、第四章で論及した鰐淵寺と青蓮院の本末関係が南北朝期において、どのように変質するのかを論じる。先行研究で全く触れられなかった延暦寺との人間関係について、南北朝期特有の政治状況から考察を加え、青蓮院が本末関係を強化する政策を採るに至った経緯を示す。そして、古来より有名な史料である「正平式目」の政治的位置付けについて再検討を行う。

第六章「『門葉記』に見る天台声明の伝承」では、青蓮院門跡内部における法儀や天台声明の実態を追うために、魚山声明に関する基本的文献である「魚山聲曲相承血脈譜」を検討する。そこに残された浄心流と呼ばれる魚山声明の伝承者を中心に、『門葉記』の記述から彼らの声明の勤仕状況を読み取り、多様な門流によって営まれる修法の一側面を浮き彫りにする。

第七章「山王礼拝講の成立に関する一考察」では、日吉大社において修された法華八講である山王礼拝講の成立過程を追う。現在にまで続く延暦寺の重要な行事にも関わらず先行研究は皆無であったが、天台教学振興という当時の風潮の中、梶井門跡承円と青蓮院慈円とが競い合うかのように各々の門徒を率いて礼拝講を整備していく様子を復元する。その際、今後の研究において重要と思われる未翻刻史料を発見したので、ここに参考史料として付けておく。

結章「中世山門寺院における本末関係―法会運営と法流―」では、第一章から第七章までにおいて明らかになった事実を適宜使いながら、山門寺院における本末関係を政治経済的側面と宗教的側面の二つの視角から考察する。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　長谷川　裕峰　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	大阪大学　教授	川合　康
	副 査	大阪大学　教授	村田　路人
	副 査	大阪大学　准教授	市　大樹
	副 査	京都学園大学　教授	平　雅行

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　　中世延暦寺の本末関係に関する基礎的研究

学位申請者　長谷川裕峰

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　　川合康

副査　大阪大学教授　　村田路人

副査　大阪大学准教授　　市大樹

副査　京都学園大学教授　平雅行

【論文内容の要旨】

本論文は、延暦寺とその末寺との関係を具体的に分析することによって、中世の本末関係の実態を多面的に明らかにしようとしたものである。序論・結章のほか７章から成る。枚数は 500 枚（400 字詰め換算）である。

序章では、研究史を振り返りながら、延暦寺の本末関係を検討する意義を確認している。そして史料的制約を突破するために、末寺史料の援用や宗教的交流から考察を進めたい、と述べている。

第一章では、葛川明王院と青蓮院門跡との紐帯役となった行者中を検討した。葛川は延暦寺の僧侶が修行する聖域であり、行者はこの葛川に参籠して修行していた。行者は葛川の聖域性を守る存在であったが、葛川の地域的発展にともない、次第に世俗的問題にも関与するようになり、鎌倉時代末には行者中が恒常的組織に変質して葛川支配を実行したことを明らかにした。

第二章では、葛川明王院に伝存する史料「青蓮院門跡領仏事用途廻文」をとりあげ、これが葛川明王院領のものではなく、青蓮院門跡領の史料であることを確定した。それを踏まえて第三章では、青蓮院門跡による所領経営の在り方を考察し、門跡の仏事用途が各所領に割り当てられていた実態を確認した。

第四章では、出雲国鰐淵寺が青蓮院門跡との関係について検討した。そして、本末関係が形成された歴史的背景やその実態を解明するとともに、鰐淵寺の法要と延暦寺のそれとの類似性を指摘して、末寺である鰐淵寺が延暦寺の修法体系に包摂された、と述べている。第五章では鰐淵寺の「正平式目」（1355 年）をとりあげ、南北朝内乱や観応の擾乱による内部分裂を鰐淵寺が克服していった道程を検討した。

第六章では魚山声明をとりあげた。魚山声明は浄心流と湛智流に分かれ、後者は現在にいたるまで相承されているが、断絶した前者については研究がなかった。申請者は、『門葉記』をもとにして浄心流の僧侶が鎌倉・南北朝時代に盛んに活動していた実態を明らかにし、応仁の乱後に岡崎衆などの院家が没落したことが、浄心流の断絶につながったと推測した。第七章では、日吉大社で修された法華八講である山王礼拝講の成立過程を追った。現在まで続く延暦寺の重要な行事であるが、これまで先行研究がなかった。そこで申請者は、梶井門跡承円と青蓮院慈円とが競い合うかのように各々の門徒を率いて礼拝講を整備していったことを明らかにした。

結章では、本寺と末寺との間での人的交流や、末寺への法儀伝播を具体化することによって、本末関係が双方向性をもっていたことを確認するとともに、本論文を総括的にまとめている。

【論文審査の結果の要旨】

延暦寺は日本中世の仏教界の中核に位置した権門寺院であり、全国に末寺末社のネットワークを張り巡らせていた。延暦寺とその本末関係の実態を解明することは、中世仏教史はもとより中世史研究一般にとって重要な課題であるが、織田信長による焼き討ちのため、史料が極端に乏しく、その把握は容易でない。申請者はこの史料的な制約を突破するために、二つの方法をとった。第一は末寺の史料をもとに、延暦寺とその本末関係の実態を明らかにすることであり、第二は聖教系の史料を援用することである。そしてこの方法によって、申請者は重要な事実を解明した。

本論文の第一の成果は、青蓮院門跡と出雲鰐淵寺との本末関係の実態を、多面的に明らかにしたことである。青蓮院と鰐淵寺の本末関係は建暦三年（1213）に成立したが、それが実現した背景に、後鳥羽院およびその息朝仁入道親王と慈円との親密な関係があったことを明らかにした。また、史料的な制約のため、鎌倉中期～南北朝期に青蓮院と鰐淵寺との本末関係が維持されていたのか不明であったが、申請者は、末寺役として鰐淵寺が納入した出雲莚が、七仏薬師法をはじめとする青蓮院門跡の修法で盛んに用いられていたことを明らかにして、本末関係が継続されていたことを実証した。さらに、鰐淵寺の年中行事にみえる法会は山門法要との類似点が非常に多く、本末関係が法儀・法脈を地方寺院に伝える役割を果たしていたことを明らかにした。

申請者は、延暦寺の僧侶としての知識と経験をもとに、聖教系史料を歴史史料として読み解き、それを活用して、法儀・法脈にまで視野を広げて中世延暦寺の本末関係の実態を多面的に明らかにした。このことは高く評価してよい。

第二の成果は、青蓮院門跡による葛川支配の在り方をより具体的に解明したことである。葛川はもともと延暦寺の僧侶が修行する聖域であったが、やがてそこに住民が住みつくようになって荘園へと変容していった。史料が豊富に残っているため研究も多く、葛川に参籠した行者が葛川支配に多大な影響を及ぼしていたことがすでに明らかにされている。この行者の組織はこれまで臨時的なものと理解されてきたが、申請者は史料を精査することによって、次の重要な事実を明らかにした。①鎌倉時代末の文保の相論を契機に、行者の組織は行者中という恒常的な組織に変化し葛川庄の支配者になっていった、②行者中は岡崎衆・浄土寺衆のように門流別で構成されていた。

このほか、魚山声明浄心流の実態を『門葉記』をもとに復元したことも、貴重な成果といえるだろう。

もちろん、残された課題も多い。これまで政治的経済的側面から論じられることが多かった本末関係を、申請者は法儀・法流といった宗教的側面にまで広げて考察し、本末関係が双方向性をもっていたことを具体化したが、他方では申請者も認めるように、本末関係の矛盾については検討が及んでいない。また、研究史整理の手続きにも瑕疵があるし、論証がなお不十分な点もみえ、文章表現にも改善の余地がある。しかし申請者が若手研究者であることに鑑みれば、本論文の達成をもとに、今後、自らの構想をさらに深めてゆくことが期待される。本論文はその基礎となる価値を十分に有している。

よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。